

ホームヘルプ事業の発祥要因の検証が示唆するもの
——長野県上田市における K さんモデル説の年代別検討を通じて——

**Inferences from Examination of Origin Factors of Home-help Services
—Through Chronological Examination of the K model theory in Ueda City, Nagano Prefecture—**

中京大学 中 瀧 洋 (005048)

[キーワード]ホームヘルプ事業, 家庭養護婦派遣事業, K さん

I. 研究目的

わが国のホームヘルプ事業は広く周知されるが、いかにして発達してきたのかは意外に知られていない。その理由として、同事業の不在時には想像し難かったり、その起源にまで気を配る必要もなかったことが考えられるが、いずれにせよ、1962 (昭和 37) 年の国庫補助事業化まで、在宅福祉を実質担っていたことを鑑みると、同事業史への注視は、公的な仕組みを生み出す前段階の動向やその展開を草の根レベルで把捉することになり、意義深い。

こうした取り組みの典型例の一つとして、1956 (昭和 31) 年 4 月から長野県上田市で始動したとされる家庭養護婦派遣事業は注目される。筆者はかつて、その実質的推進役とされ、上田市社会福祉協議会 (以下、市社協) 初代事務局長を歴任した竹内吉正 (1921. 1. 15-2008. 12. 14, 以下、竹内) の日誌を基に、同事業の推進過程に迫り、市社協などの協議者側への危機意識と、一方で地域性や連帯性を視野に入れた地域の人々への啓発や PR を行っていたことを実証的に跡付けた。加えて、この先駆的な地方の取り組みが公的事業化の他、実践現場や教育現場にも現任研修や人材養成を通じ、影響を与えていたという推考を得た¹⁾。

これらを検証するために、家庭養護婦派遣事業や竹内に関する第一次史料をはじめ、現地で史資料を精査する必要があった。筆者はこの過程で、同事業関連第一次史料を発掘・収集し (中瀧 2014b・c など)、当時の関係者の思索を通して、同事業の組織化の過程を初期段階からアプローチした。しかし、こうした研究成果の一方、戦後日本のホームヘルプ制度の幕開けをもたらした長野県告示「家庭養護婦の派遣事業について」(31 厚第 235 号, 1956 年 4 月 9 日) のそもそもの発端とされる K さんモデル説に関し²⁾、中瀧 (2012:24-43; 2014d:69-78 など) の試論があるものの、明確な根拠を基に、十分に整理されていない。と同時に、同事業推進の当事者として、K さんを大々的にとり上げた竹内自身、時間の経過とともに記述内容を変化させており、関連史資料と整合しない部分があることも見逃せない (竹内 1974a:51-69; 1977a:5; 1977b:5 ; 1991:14-29 など)³⁾。

その一例を挙げると、K さんの奉仕活動をとり上げた竹内は、彼女が活躍した場所として上田市中心部木町と論じるが (竹内 1974a:51; 1974b:54; 1991:15 など)、当時の木町は西部地区に存在していたこと (信州民報社 1953:1)、K さんの約 3 年間にわたる近隣の地道な奉仕活動に対する表彰の有無について、あくまでも拒み続けたとする竹内 (1974a:53-6; 1974b:59-63; 1991:18-21; 小笠原監修 1999 など) に対し、昭和 33 年市社会福祉大会で社会福祉事業協助者として表彰されたという記述が残されていること (保健福祉地区組織育成中央協議会 1959:17)、あるいは、K さんのその後については、「上田市から広島市へ転居、広島原爆病院でボランティア活動を続けた」とされる一方 (上村 1997:250; 小笠原監修

1999;山田 2005:194 など),「高山市でボランティアとして活躍している」などと(竹内 1977b:5),異なる地域での活動が論じられることなどが挙げられ,事実確認や実態把握が未整備な状態にある⁴⁾.こうした竹内の論説に認められる記述内容の不整合性や関連史資料との不一致が故意か偶然かという点についての洞察は,より複眼的・多角的・実証的な考察から深い論議へと深化することが可能となる.本研究では,「社会事業史としては,発生史的視点は重要」とする吉田(1979:19)に立脚し,ホームヘルプ事業の発祥要因の一つとされるKさんモデル説をその典拠並びに普及過程を鍵としながら検証する.

II. 研究の視点及び方法

こうした問題意識の下,本発表では,戦後日本のホームヘルプ事業の発祥地とされる長野県上田市の事例に特化し,なかでも,竹内の執筆には何らかの意図があったとする仮説の下に,Kさんモデル説の検証からその発祥要因を明確にすることを目的とする.その際,竹内論文に登場したホームヘルパーのモデルとされたKさん像にも迫りながら,2つのKさんモデル説を検証する.その上で,矛盾が生じる原因を指摘しつつ,彼自身の意図や思考,さらには一連の発祥要因の検証そのものが呈するものを具体的に考究する.これらの検討は,ホームヘルプ事業史という歴史研究の一端をただ単に推し進めるだけでなく,史実や通説を論じたり伝承したりする際の意義並びに留意点を示唆するものと考え得る.

研究方法としては,家庭養護婦派遣事業や竹内に関する第一次史料を主に引用・分析し(保健福祉地区組織育成中央協議会 1959:17-21;上田市社会福祉協議会 1958a;1958b:1;竹内 1974a:51-69;1974b:54-75;1974c:58-79;1991:14-29;小笠原監修 1999;中嶋 2014a・b・c など),加えて,同市社協地下書庫,同市立図書館郷土資料室,同市公文書館などに所蔵されている関連史資料も用いる.さらに,筆者による同事業関係者や地域住民へのインタビュー調査の結果も引用する(2007年8月16-7日;2020年2月25-6日など).

III. 倫理的配慮

他方,倫理的配慮としては,竹内関連史資料については彼の実兄の花里吉見氏から2009(平成21)年10月3日に使用許可及び研究の範囲内での公表の許可を得た.また,市社協関連史資料については,2014(平成26)年8月18日及び2018(平成30)年11月19日に宮之上孝司氏(同市社協会長)から同様の許可を得た.さらに,インタビュー調査に協力していただいた地域住民の方々にも,その都度,同様の許可を得た.加えて,「日本社会福祉学会研究倫理規程」を参照し,筆者の所属校の研究倫理審査委員会の承認を得た(中京研倫第2019-007号,2019年7月17日承認).

以下,III章では1959(昭和34)年時のKさんモデル説の特徴を把握し,IV章では1974(昭和49)年時のKさんモデル説の特徴にアプローチし,V章では2つのKさんモデル説に見られる相違を明確にし,そこから意図される竹内の思索を具体的に考究し,VI章ではホームヘルプ事業に関する発祥要因や起源そのものへのアプローチが示唆するものを論考する.

IV. 研究結果①:1959(昭和34)年時のKさんモデル説の検証——「木町のお

ばさん」の働きと上田市社会福祉協議会社会事業協助者表彰

Kさんモデル説のなかで彼女が活躍したとされる1953(昭和28)年～1955(昭和30)年頃の同県下は、戦後復興を旨とし、「もはや戦後ではない」という文言が登場する直前期にあり、小地域社協育成モデル地区指定事業(1953年)や世帯更生運動(同)の推進の一方、人々の生活改善・転落防止のための世帯更生資金貸付事業の開始(1955年)が見られるなど、いわば多くの人々に奮起が求められていた。その反面、社会保障関係費大幅削減案(1954年,旧大蔵省)が提起されるなど⁵⁾、人々の生活はけっして安定したものとは言い難かった。

こうした時代背景とKさんが登場する舞台とを重ね合わせながら、戦後日本のホームヘルプ事業の起源を1950年代前半に着目しつつ論考した竹内(1974a:51-69)だが、彼の論稿は従来、先行研究で多用され(米本 1985:8-30;長野県ホームヘルパー協会編 1991;須加 1996:87-122;上村 1997:247-57;赤星 1998;山田 2005:178-98;上田市社会福祉協議会50年の歩み編集委員会編 2006;荏原 2008:1-11;中畷 2010:71-83;2012:24-43;2013;2014a・b・c・d:69-78;2019:1-13など)、加えて、既述の如く、ホームヘルパー(現、訪問介護員)や介護福祉士の養成テキストでも史実として屢々引用されている。しかしながら、Kさんモデル説を最初に論じたものが竹内(1974a:51-69)ではないことはあまり知られておらず、とりわけ、竹内(同)よりも15年前に執筆された保健福祉地区組織育成中央協議会(1959:17-21)の存在は注目に値する。そこで、同論文を書き出しから紐解いていく。

第三 地区組織活動の事例(事例その一)木町のおばさんの働き 二九年頃から旧市域の木町のおばさんKは、私欲なく、すこぶる寛大で同情心が深く誰に対してもよく面倒を見て町内で之を称讃しない者はなかった。特におばさんは、要保護家庭を選び、病人の世話をし、孤独な老人の身の周りの世話をした。昭和三三年市社会福祉大会において遂に社会福祉事業協助者として表彰されるに至った。そしていまもまだ無報酬の労を惜しまず奉仕活動をしている。(保健福祉地区組織育成中央協議会 1959:17, 傍点筆者)

上記から、約66万世帯が被保護世帯であった1954(昭和29)年当時、困窮・窮乏に直面する人々が多いなか、同市木町在住のおばさんKが要保護家庭や一人暮らし高齢者を支援していたことが明かされ、加えて、その殊勝な行動が市社会福祉大会における表彰という形で讃えられていたことが示唆される。ここでは、「市の民生委員や社会福祉協議会、さらには県社会部などの注目するところとなり、……」と述べた米本(1985:8)とは、Kさんが影響を与えていた範囲という点で若干の相違が見られ、一方、「Kさんは、自分の意志でボランティア活動をはじめたのであり、名前を知られることも表彰されることも望まなかった」と論じた上村(1997:250)の推論を覆す結果が得られた。さらに、1958(昭和33)年市社会福祉大会で表彰されたKさんとはいったい誰で、どのような人物であったのかにアプローチしたところ、その一端を示す記事が『うえだ社協ニュース』(第7号,1958年,第1面)に残されており、同記事は、「両親が先ず子供をよく理解しよう」——上田市児童福祉大会から」という標題が付され、以下のように記される。

児童福祉法施行十周年を記念して上田市児童福祉大会が開催されたが、その席上次の人々が栄ある表彰を受けた。社会福祉事業特別功労者 新美勝子（大屋）、坂口貞子（中吉田）、社会福祉事業協助者 小出 許（木町）、児童福祉事業特別功労者 伊藤富久子（新田）、児童福祉事業協助者 平林君子（上鍛冶町） この日、特に戦後窮乏のときからいままで児童のために温かい厚情をよせてくれたCAC三団体に対し、感謝決議がなされ、参加者は二部会に分れ協議が交された（議事録は県身障更生指導所補導生により印刷製本中）。（上田市社会福祉協議会 1958b:1, 丸括弧内ママ, 下線・ルビ筆者）⁶⁾

同様に、同市社協地下書庫に所蔵されている「被表彰者名簿 上田市社会福祉協議会表彰社会福祉事業功労者」（上社発第24号, 1958年5月22日）を紐解くと、「新美勝子（民生委員・児童委員, 大屋）、坂口貞子（民生委員・児童委員, 中吉田）、伊藤富久子（保育園保母, 新田）、平林君子（上鍛冶町）、小出 許（木町）」と（下線筆者）、ここでも同様の5人の名前を確認できる。つまり、これらから、同市木町で活躍し、表彰されたおばさんKとは、「小出 許」（1908-1997, 以下, 小出）であったと認め得る。さらに、詳細を掘り下げるべく、筆者は2020（令和2）年2月26日に、春原行徳・尚江夫妻（木町元自治会長）、西沢静江氏（木町住民）へのインタビュー調査を行い、小出に関し、「小出のお婆ちゃんは鉄砲長屋に住んでいて、夫婦ともに面倒見がよく、優しかった。こまめな性格で、よく雪かきをしてくれた。武家屋敷跡に住んでいた一人暮らし高齢者や全盲の按摩師の世話をよく見ていた。一言で言うと、奥ゆかしいという感じ。（許という）名前の通りに生きた人だった…」などという証言を得（丸括弧内筆者）、彼女の活躍ぶりの一端が具体的に明かされた⁷⁾。

V. 研究結果②：1974（昭和49）年時のKさんモデル説の検証——竹内吉正が論じたKさんモデル説と“クリスチャン未亡人”

前出の小出をモデルとしたKさん説は、それから15年後の竹内（1974a:51-69）の登場まで目立ってとり上げられることはなく、「この事業が日本ではじめて実施されたのは長野県上田市だといわれている。当時私は市社協事務局長として奉職、昭和36年4月県社協に移動（ママ）したが、豊富な資料に記憶をたどりながら綴ってみたい。」という書き出しで始まる竹内（1974a:51-69）以降、突如、注目されることになる。その理由の一つとして、長野県社協組織課長（当時）を務めていた竹内が執筆した「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」と題する論稿が、1974（昭和49）年5月31日に、第1回老人福祉文献賞（入選）を受賞し、一躍衆目を浴びることになったことが挙げられ、加えて、『信濃毎日新聞』内でも、1977（昭和52）年6月6日～7月4日までに5回にわたり特集された「老人介護を考える——家庭奉仕員の現状1～5」において、Kさんや上田市でのホームヘルプ事業の展開が竹内によって論じられたためであった。これに続く米本（1985:8-30）、全国民生委員児童委員協議会（1985）、上村（1997:247-57）、赤星（1998）、介護福祉学研究会監修（2002）などの先行研究では、漏れなく竹内によるKさんモデル説が引用され、こうして戦後日本のホームヘルプ事業の起源についての通説が徐々に形成されていった。その具体的内容の一端は次の通りである。

昭和 30 年秋、中央地区民生委員会（現在の単位民協）に出席したときのことである。F 委員①が次のような発言をした。「担当地区で中年の婦人 K さん②は、母親の困っている家庭に出向き、こまごまと手伝ったり、孤独な老人の話し相手になったりして、もう 3 年来、かくれた奉仕活動をしている。その献身的な協力に地域住民から感謝の意を表したいという意見が盛り上がっている」「K さんは現在、未亡人で 3 人の子供を成長させ、貧しいながらも立派な家庭を築いている」と。さっそく F 委員に伴われて話題の K さんを訪ねた。木町という場所は、かつては花柳界があったところで家並みがひしめきあっており、その裏小路に住んでいる母子家庭に K さんがおり、保育所へ出かける子供の世話をすませ、病床にある母親と話し合っているところだった。私たちの訪問を不思議そうな顔をして迎えた K さんは、奉仕活動の動機について、戸惑いながら「幼い子供を 2 人もかかえて、母親が病に倒れば、どうにもならないでしょう。見るに耐えず、ご近所ですもの…」。そして、「私の子供達は、もう大きくなったので（長女・会社員、長男・小 6 年、次男・小 1 年）」と答えてくれた。（竹内 1974a:51, 丸・鍵括弧内ママ, 下線・傍点筆者）⁸⁾

ここから、竹内が論じた K さんは 3 人の子どもをもつ未亡人とされ、上記に続く「近くの妊産婦家庭や多子家庭で病弱な母親のため、朝の忙しい時間を手伝い、勤務が終わった帰りには、1 人で暮らす老婆の話し相手になっているという。そして『みんなお話ししてみると、何らかのかかわりがあって不思議な程です』という。そんな K さんの態度には、ことさらに気負ったところはなく、さりとして構えをもつでもなかった。K さんが熱心なクリスチャンであることを知ったのは、それから間もないことだった。」という文章からは（竹内 1974a:51, 傍点筆者）、彼女が敬虔なクリスチャンでもあったことが竹内によって言及される。

VI. 研究結果③：2つの K さんモデル説の相違点

以上の通り、木町での奉仕活動により表彰された小出を題材にした 1959 年時の K さんモデル説と、呑風を父とし、クリスチャン未亡人として地道な生活を送った 1974 年時の K さんモデル説の内実を実証的にアプローチした。ここで、従来の単眼的アプローチを超え、複眼的・多角的に捉え直すことで新たな側面を照射するべく、この 2 説を（1）K さんが活躍した場所及び担当民生委員、（2）婦人民生委員による K さんへの批判、（3）家庭養護婦としての登録の有無、（4）K さんのその後の足跡の 4 点から究明したところ、（1）では、当時木町は中央地区ではなく、西部地区であったことに加え、木町担当民生委員が古松国幹ではなく宮坂あきの担当であったこと、（2）では、栄養指導を巡って話し合いがなされたものの、竹内（1974a:51）や上村（1997:247-8）らが論ずる K さんへの批判や中傷は皆無であったこと、（3）では、竹内（1977b:5）の指摘のように、K さんの家庭養護婦としての登録はなかったこと、（4）では、K さんのその後について竹内自身でさえ、広島移住説と高山移住説の 2 説を唱えるなどブレを生じさせていたことなどが明かされた（小笠原監修 1999）。

VII. 考 察——ホームヘルプ事業の発祥要因の検証から導出される新知見

1. 竹内がボランティア活動を重視した意図

既述の通り、国民健康保険法公布（1958年12月）や国民年金法公布（1959年4月）などが見られた1950年代後半に、小出をモデルとしたKさん説が論じられ、一方、特別児童扶養手当等の支給に関する法律公布（1974年6月）や雇用保険法公布（同年12月）などが見られた1970年代には、葉子をモデルとしたKさん説を竹内（1974a:51-69）が論説していたことを浮き彫りにした。ここでは、本発表で想察した仮説を検証するべく、竹内思想に迫る。

まず、彼は、「上田市内にあったホームヘルプサービスは、素朴な形で“近所の母親が困ったら飛んでいって手伝ってあげる”という出発であった。」と（竹内 1974b:73）、同市の地域性に注目する⁹⁾。その上で、「Kさんの行うボランティア活動を大切に取扱い、民協は社協と協力、全市的な活動を促す万全の配慮を即応させた。また、行政機関は深い認識にたつて、この民間活動の育成に最善の努力を傾注した。このことなくして本事業は展開できなかったと思う。」などと考察し（竹内 1974a:55）、官民協働の機能を重視する。

他方、「ボランティア活動として小地域にきめ細かく、市民参加の姿が芽ばえることが期待されねばならない」と竹内（1974b:63）は述べ、「本事業発足のヒントとなったボランティアKさんは、本事業が開始されても、養護婦として登録する希望を終始抱かず、黙々として相変わらぬ奉仕活動を継続する心情がそこにあったのではないだろうか。」などと（竹内 1974b:63）、あるべき市民参加の姿を「ボランティア」という文言を用いながら強調する。

上記をさらに具体化したものに、「Kさんの事にふれて改めて感じることは、その地域周辺の協力関係ということだ。そして、ここに老人家庭奉仕員とのかかわりで動くボランティア活動の必要性が出てくると思う。つまり、奉仕員一人につき数人のボランティアがあれば素晴らしいのではないか——。しかし現実には、この協力関係が遅々として進んでいないのが現状である。だからこそKさんは、この領域で最善をつくすことに生きがいを見いだしているのではないかと思われる。」などがあり（竹内 1977b:5）、ここから、拡がり期待されるボランティア活動の好例として、Kさんの事例が位置づけられようとしたと考究できる。

なお、「突発的な地震、火災などが起きたとき即応できる協力体制とは、いったいどんな姿なのだろうか。ぜひともその地域なりに創造せねばならない緊急課題だろう。在宅老人の福祉は、老人家庭奉仕員だけで事足りるものではなく、また達成できるものでもない。」などと（竹内 1977b:5）、竹内が不測の事態に備えようとしていたことも注目に値する¹⁰⁾。

2. 制度の狭間問題と報道のあり方

最初のKさんモデル説が登場する3年前の1956（昭和31）年4月に家庭養護婦派遣事業が組織化されて64年が経つ。しかし、吉田（1979:17）が言う「発史的視点」の吟味が、これまで同事業史において十分であるとは言い難く、確かに、1950年代には補助金が削減される一方、未亡人互助会の組織や活動促進費（法外援護費）の付与などの施策展開が見られたが、小出の奉仕活動や葉子のクリスチャン未亡人としての生活を注視し、同事業の発祥要因を捉え直すことがいったい何を示唆することになるのかが論じられてこなかった¹¹⁾。このことがこのテーマに関する先行研究間で矛盾を生じさせる一因と考えられた。

竹内は、「地域周辺の協力関係」（竹内 1977b:5）、「老人家庭奉仕員とのかかわりで動くボランティア活動の必要性」（同）、「黙々として相変わらぬ奉仕活動を継続する心情」などと（竹内 1974b:63）、ことさらボランティア活動の意義を強調し、「制度が充実し、また予算

が充実してくる。そういうなかで漏れる人が必ずある。そこにいかに目を向けるかということが、あの～、Kさんの一番の大事にしたいところだと思っていらっしゃると思いますし、それを貫いていくということがKさんの一つの人生観であったり、世界観でないか。」と述べ（小笠原監修 1999）、昨今、問題視される制度の狭間問題にいち早く気づいていた。

加えて、社協などの民間組織では、住民理解や民意を要とし、その報道のあり方がいかに重要であるかを認識しており、「ホームヘルプに関する記事は、特に事業開始前後は、毎日のように地方新聞の報道やラジオ放送取材の対象となることが多く、常に公的機関の神経を鋭敏にするところとなった。…（中略）…これらの動きは社協を軸として、関係機関、団体の協力体制を積極的に強化するのに役立った。つまり、各種の報道は、民間という力の弱い社協を幾度か勇気づけ、現実にある堅い困難をひとつひとつ克服してきた」と竹内（1974a:55）は吐露し、社会福祉事業の展開過程における広報の意義を把握しようとする¹²⁾。

このように、Kさんモデル説を巡っては、①ボランティア活動の組織化、②制度の狭間問題、③官民連携、④報道のあり方の4点が竹内によって世に問われようとしていた。

VIII. まとめ

以上、ホームヘルプ事業の発祥要因を1959（昭和34）年時と1974（昭和49）年時の両時期におけるKさんモデル説の精査を通じて検討した。公的制度の対象とならない諸問題への組織的・自主的対応の強化が模索されるなか、その模範として小出がとり上げられたのが前者であり、これがKさんモデル説の原型となっていた。一方、後者では、葉子をモデルと捉えた竹内が、雇用保険法公布や国際婦人年などを背景に、母子家庭、多子家庭、一人暮らし高齢者などの日常を照射し、「クリスチャン未亡人」という用語を用い、不遇な環境下の人々への発奮を促そうとしていたことを実証的に跡付けた。そこには、単なる偶然では済まされない、彼自身の問題把握や生活苦の人々への理解の深化を促す、幾つかの実体験や潜考があり、ここに、竹内には何らかの執筆意図があったとする本発表の仮説が検証され得た。

しかしながら反面、時代背景の異なる2つのKさんモデル説は、後続の研究者たちによって十分に整理されぬまま、一人物についての先駆事例と判断されるようになり、“青い鳥”などが示すように（竹内 1974a:69）、実態把握や詳細な検討が困難なケースとして認識されるに至ったことを明らかにした。ここに、歴史研究における対象の捉え方や通説を伝承する際の留意点と、典拠となる実証的裏付けの意義を認識できよう。但し、地方の先駆事例やそれに纏わる美談・逸話の数々は未だに十分に浮き彫りにされていないことも少なくない。今回は、戦後日本のホームヘルプ事業史における長年の未確認事項であったKさんモデル説の解明に努め、史実の整理に加え、社会背景や関係者の思索にまで踏み込んだ点に一步前進が見られ、こうした齟齬を探ることが、今日的な通説の特質を鮮明にすることとなった。

他方、歴史研究において、発生史的視点に着目する際の方法論についても付言すると、書き手への批判並びに生活者としての人間という視点を軽視してはならないだろう。吉田（1979:9）は「オリジナルか借用かということで、社会事業には借用史料で行う史料解釈が意外に多い」と注意喚起し、そこには「仮説的部分が多々あり、たえずリスクを冒す」可能性を指摘する（同：16）。それは、「文学的歪曲」や（同：9）、「物語の組みたて」などにもつながる危険性を孕んでいるため（御厨 2011:85-6）、注意を要する。また、そもそも「問

題解決を前提としない社会福祉はあり得ない」ため（吉田 1984:1-2），そこに美談や逸話が入り込む余地が生じやすいことにも留意が必要である。「社会事業史とは総合的認識が必要」とされるように（吉田 1979:7），多角的・適時的・実証的な検討を疎かにしてはなるまい。

加えて，社協などが行う民間社会福祉事業に関しては，様々な理由から史実として活字にはなりにくいものもあるが，旧来，史資料には残されていないだろうと考えられている史実をていねいに掘り起こし，史資料の行間を埋めることは貴重なことであり，歴史研究者の責務ともいえる。また，誤訳や矛盾を生み出しがちな背景事情や根本要因を探究することも基礎作業として重要である。こうした丹念なとり組みを通じ，後世に伝えるべき，ホームヘルプ事業の隠れた歴史を紐解くことが可能となるのである。

以上を踏まえ，今後は，Kさんモデル説を力説した竹内が，1974（昭和49）年以降，宝池住吉寮長，神愛会事務長，小諸学舎理事長などと転職を重ねつつ，地方の民間福祉事業を促進した経緯を，1980～90年代に着目しながら，実証的に解明することを課題としたい。

注

-
- 1) 例として，介護福祉学研究会監修（2002:35），和田・橋本（2005:75），養成研修テキストブック編集委員会編（2006:93），荏原（2014:25）などのテキスト類が挙げられるが，表面的な事実認識に留まることにより，その背後に潜む本質の見落としが懸念される。
 - 2) この説は，1953（昭和28）年頃から上田市内で見られた家庭養護ボランティア活動に端を発すものであり，とりわけ，熱心だった一人の民間女性の名字の頭文字をとって「Kさんモデル説」と命名されるが，Kさん自身へのアプローチに研究の余地が残される。
 - 3) 時代変化とともに記述を変えなければならなかった理由や背景に迫ることが，新しい史実の発見や今後への示唆をもたらす手がかりを得るものと考えられる。
 - 4) 吉田（1979:9）は「（史資料の）蒐集が終ったら史料批判である。…（中略）…特に陳述史料や代筆・代作が多い社会事業研究にあつては，可信性の限度が問題となる。そして，社会事業界にはまだ美談史料が多いことも注意しなければならない」と述べ（丸括弧内筆者），史資料そのものの吟味を重視していることも注目される。
 - 5) 1955（昭和30）年度の上田市議会では，補助金（500万円）や消費費物品費（約200万円）が削減されたものの，この当時，補助金削減が人々の生活を脅かすという危機感が市会議員たちにとって，今ほど高くはなかったことが窺える（信州民報社 1955:1）。
 - 6) 当日は，「社会福祉事業に五年以上勤めた人々五人を表彰する」と報じられ（信州民報社 1958:1），『うえだ社協ニュース』第7号，第2面の「社協だより」では，1958（昭和33）年7月31日に表彰委員会が開催され，翌8月2日に同大会が開催されたとされる。
 - 7) 一方，小出の次男，幸男氏からも表彰の事実が確認され，「安藤病院の隣の産育会館において住み込みで働いていた高齢女性の世話を日常的に見るようになった。……」という証言を得た（2020年4月4日，筆者による小出幸男氏へのインタビュー調査より）。
 - 8) 全国民生委員児童委員協議会（1985:715）や上田市社会福祉協議会50年の歩み編集委員会編（2006:186）などでは，Kさんの博愛精神や地域住民の連帯性が強調される。
 - 9) 『うえだ社協ニュース』内で，上田市が優良社会福祉地区と評されたように，（上田市社会福祉協議会 1959:2），同市内は社会福祉を育む土壌が豊かであったと推察される。
 - 10) 竹内（1977b:5）はさらに重要なこととして，「奉仕員自身が，対象老人を含め，その周辺の地域福祉へのかかわりで主張できる，貴重な立場にいることを自覚してほしいこと

だ。」などと述べ、アドボカシー機能を重視していることも注目される。

- ¹¹⁾ 「歴史の検証は、ただ過去を振り返ることではない。先駆者の辿った歩みの中から過ちは捨て、施設設立の動機や運営の精神から高齢者福祉の原点を学び、……」から（小笠原監修 1999）、物事の原点を見直すことから学ぶべきことは少なくないと論及される。
- ¹²⁾ 一方、「報道関係者は、素材として恰好の対象であるだけに少し派手に取り上げがちであり…（中略）…一度報道されれば、そのことを、いつか自分たちの既成事実として認めてしまう危険性」を指摘し（竹内 1975:32）、報道のあり方に警鐘を鳴らしている。

史料

- 保健福祉地区組織育成中央協議会（1959）『活動記録 上田市の保健福祉活動』。
- 信州民報社（1953）「四十五名の新生委員決る」『信州民報』（1530），1953年12月12日，1。
- 信州民報社（1955）「補助金で五百万削減」『信州民報』（2072），1955年9月23日，1。
- 信州民報社（1958）「社会福祉大会は選挙後に」『信州民報』（2857），1958年4月24日，1。
- 竹内吉正（1977a）「老人介護を考える——家庭奉仕員の現状 1」『信濃毎日新聞』（34263），1977年6月6日，5。
- 竹内吉正（1977b）「老人介護を考える——家庭奉仕員の現状 5」『信濃毎日新聞』（34291），1977年7月4日，5。
- 上田市社会福祉協議会（1958a）「被表彰者名簿 上田市社会福祉協議会表彰社会福祉事業功労者」（上社発第24号，1958年5月22日）。（上田市社会福祉協議会蔵）
- 上田市社会福祉協議会（1958b）「“両親が先ず子供をよく理解しよう”——上田市児童福祉大会から」『うえだ社協ニュース』（7），1。（上田市社会福祉協議会蔵）
- 上田市社会福祉協議会（1959）「社会福祉事業功労者 太田以止さんら表彰さる」『うえだ社協ニュース』（11），2。（上田市社会福祉協議会蔵）

映像資料

- 小笠原祐次監修（1999）『高齢者福祉の歴史 9 介護サービスの先駆け』TEC映像アカデミー。

文献

- 赤星俊一（1998）『やさしいホームヘルパー入門』みらい。
- 荏原順子（2008）「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』（6），1-11。
- 荏原順子（2014）『介護職養成教育における専門性の形成』大空社。
- 介護福祉学研究会監修（2002）『介護福祉学』中央法規出版。
- 上村富江（1997）「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー』ミネルヴァ書房，247-57。
- 黒木利克（1959）「育成協の社会的役割」『公衆衛生』23（9），7-11。
- 牧 賢一（1959）「コミュニティ・オーガニゼーションの理論について」『公衆衛生』23（9），1-6。
- 御厨 貴（2011）『オーラル・ヒストリー——現代史のための口述記録』中公新書。

-
- 長野県ホームヘルパー協会編 (1991)『長野県ホームヘルパー協会 20年のあゆみ』第一印刷.
- 中寫 洋 (2010)「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」『日本の地域福祉』(24), 71-83.
- 中寫 洋 (2012)「長野県上田市における家庭養護婦派遣事業のモデルに関する仮説検証」『學苑』(862), 24-43.
- 中寫 洋 (2013)『日本における在宅介護福祉職形成史研究』みらい.
- 中寫 洋 (2014a)『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』久美.
- 中寫 洋監修 (2014b)『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭養護婦派遣事業——長野県上田市資料1』近現代資料刊行会.
- 中寫 洋監修 (2014c)『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第2巻 家庭養護婦派遣事業を支えた人々』近現代資料刊行会.
- 中寫 洋 (2014d)「生活変化及び信仰を通して考える歴史的アプローチの構造」『帝京平成大学紀要』25, 69-78.
- 中寫 洋 (2019)「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ——上田市社会福祉協議会事務局時代の竹内吉正を中心に」『社会福祉学』60(3), 1-13.
- 重田信一 (1960)「保健福祉地区組織活動」『公衆衛生』24(4), 1-6.
- 信濃毎日新聞社開発局出版部編(1974)『長野県人名鑑』信濃毎日新聞社(上田市立図書館蔵).
- 須加美明(1996)「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会関係研究』2(1), 87-122.
- 竹内吉正 (1974a)「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」『老人福祉』(46), 51-69.
- 竹内吉正 (1974b)「ホームヘルプ制度の沿革と現状——長野県の場合を中心に」『住民福祉の復権とコミュニティ』54-75.
- 竹内吉正 (1974c)「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」『老人福祉文献賞 第一回入選作』社会保険出版社, 58-79.
- 竹内吉正 (1975)「主婦たちの悩みとその周辺」『月刊福祉』58(10), 31-3.
- 竹内吉正 (1991)「ホームヘルプ制度発足の周辺」『長野県ホームヘルパー協会 20年のあゆみ』第一印刷, 14-29.
- 上田市社会福祉協議会 50年の歩み編集委員会編 (2006)『住民と共に歩んだ50年』上田市社会福祉協議会.
- 和田 勝・橋本泰子 (2005)『改訂 実践ホームヘルパー養成講座 2級課程』全国社会福祉協議会.
- 山田知子 (2005)「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大学研究紀要 人間学部・文学部』(90), 178-98.
- 米本秀仁 (1985)「北海道におけるホームヘルパー史」『北のホームヘルプ活動——まちに生きるおとしよりの杖になりて』北海道ホームヘルパー協会, 8-30.
- 吉田久一 (1979)『現代社会事業史研究』勁草書房.
- 吉田久一 (1984)『日本貧困史』川島書店.
- 養成研修テキストブック編集委員会編 (2006)『訪問介護員(ホームヘルパー)養成研修テキストブック 2級課程』ミネルヴァ書房.
- 全国民生委員児童委員協議会(1985)『民生委員制度七十年史』全国民生委員児童委員協議会.